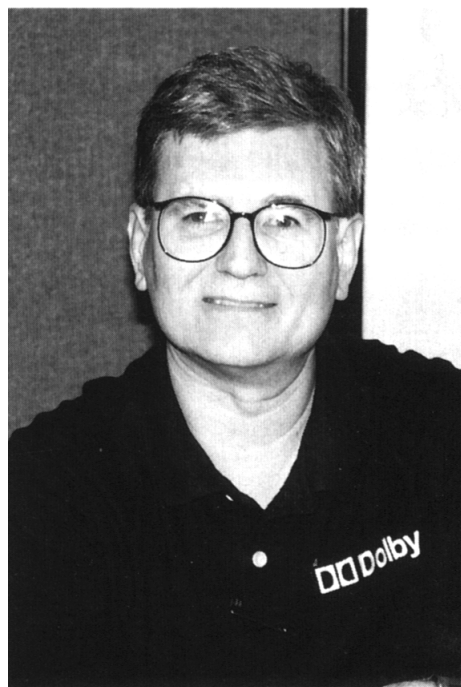


サ

ンフランシスコのドルビー研究所で技術戦略を統括しているロジャー・ドレスラー氏が来日し

た。彼は80年半ば、AV市場でドルビーサウンドを立ち上げる時から、われわれジャーナリズムの人間に様々な技術情報を提供して下さったドルビーラボのキーパースンの一人だ。そんな彼から「忙しい来日スケジュールの合間を縫って」ぜひ会いたいという電話を頂戴した。そこで指定された9月8日、ぼくはドルビーラボ日本支社(東京・新富町)へと急いだのである。

「最近、ドルビーデジタルよりもDTSSのほうが音がよいとアメリカ、日本を問わず専門誌上で言及されるケースが多いようですが、この報道に対してわれわれは少なからず不満を持っています。LDでドルビーデジタル、DTSS盤両方が出されるケースが増えて来て、その比較試験の結果、そういう記述がされるようになったのだと思いますが、この比較はあまり意味がないと私は思うのです。というのも、われわれはオリジナルの6chマスタをそのまま正直にドルビーデジタル5・1chにエンコードしているのですが、DTSS陣営はDTSS-LD用に新たに5・1chミックスを行っているケースが多いのです。われわれと違って彼らはLDの発売を自ら手がけていますからね。つまり、同一タイトルのドルビーデジタル盤、DTSS盤を比較聴試しても、決してコーディング方式の比較にはならないということを私は言いたいのです。例えば『ジュラシック・パーク』のTレックス登場シーンにおける両音の臨場感の違い。これはドルビーデジタル、DTSSという



ドルビーラボラトリーズ
ライセンシングコーポレーション
技術戦略室室長
ロジャー・ドレスラー
Roger Dressler

それぞれのコーディング方式による音質差によって生じているのではなく、ミックスの違いに起因しているのだ」とのつけから畳みかけるドレスラー氏。たじろぐ編集長……。

しかし、昨年11月号「DTSS訪問記」でユニバーサル・スタジオのサウンドデザイナーを取材したとき、彼らはファイナル・ミックスされた6chマスタはすべてのサウンド・フォーマトの元になるもの、侵すことのできない神なりファレンスであると発言していたが……。

「いや、6chマスタは数種類存在しているケースはたいへん多いんです。少なくともユニバーサル作品のDTSS-LDはすべてホームシアター用にリミックスされていると考えていいでしょう。」

うん。確かに「ジュラシック・パーク」については、ドルビーデジタルLD、DTSS盤LDで明らかにミックスの違い、サウンドデザインに違いがある印象を受けるが、この件はもう一度取材する必要があるそうだ。
「また、圧縮率の違いによって音質差が生じているという記述も多いようですが、決してそんなことはないというのが私の見解です。確かに転送レートでいうと、ドルビーデジタルは384k bps(キロビット/秒)。LDの場合)もしくは448k bps。いわゆるDTSSは141k bpsもしくは1536k bpsと3.4倍の差があります。しかし、ドルビーデジタルの場合は、マスキングなど音響心理を利用した高効率符号化のノウハウを駆使しており、単に転送レートが低い、圧縮率が高いから音がよくないというふうには決めつけられないはず」

ちなみにDVD5・1chの転送レートは、映画ソフトの場合、ユニバーサル作品が448k bps、その他のメジャー系作品が384k bpsというケースが多いですね。最近増えて来た音楽ものの5・1ch DVDは、そのほとんどが448k bpsで収録されています。では、この音を

転送レートが低いから
ドルビーデジタルが
DTSSよりも音質が劣る。
そんなことは
断じてありません!

聴いてみて下さい」とドレスラー氏はニヤリ。

ドルビーラボ日本支社の視聴室に設置されたB&Wのスピーカーによる5・1chシステムで、タスカムDA88に収録された音楽ソースの5・1chリニアPCMマスタの音と448k bpsでドルビーデジタル5・1chに符号化された音の比較聴試が始まったのだ。エマーソン、レイク&パーマーの『ラッキーマン』(なつかしい)など70、80年代に録音されたポップ系マルチチャンネルを数曲聴き比べたが、この試聴環境で聴く限りは、リニアPCMマスタに対して、明らかな情報量の欠落や音の品位の低下を感じさせることはなかった。

「純粋な音楽ソースをドルビーデジタル5・1chでコーディングして、これだけの高音質が維持できるのです。これからはDTSS陣営に負けたくない音楽業界にも積極的にドルビーデジタルによるマルチプログラムのプロモーションを展開していきたいと考えています」とドレスラー氏。DTSSの攻勢に対して、どんと受けて立ちましょうという意気込みを示し始めたドルビーラボ。今後の動向を注目していきたい。
(本誌・山本)